



異世界転生した名探偵は
無力でしかない



異世界転生者探偵
穂村くんの事件簿

ゆうすけ

プロローグ

俺の名前は穂村。

探偵だ。

そして、俺の目の前に居る男は守谷教授。

犯罪界のナポレオンの異名を持つ俺の宿敵だ。

守谷教授は東京大学の数学教授、政治に口利き出来る有識者としての表の顔を持ちながら、裏では数多くの犯罪に関与し、この世界を表裏両面から操っている人物だ。

しかしながら、彼は決して犯罪に関与している証拠を残さず、秘密を知る者は一人残らず始末してきたので、警察の捜査線上に上がることは無かった。

誇張ではなく、未開区事件の多くは彼の仕業である。

警察からの依頼で近年多発する未解決事件を調べていた俺は、その背後で世界を動かす守谷教授の存在に辿り着いたものの、警察からの依頼は打ち切られる事となった。

守谷教授は政界、警察幹部とも強いコネクションを持つ為、警察を操る事は容易い事だったので。

孤立無援となった俺は独自に捜査を続け、守谷教授の企みを先読みして犯罪を未然に防ぐ事に成功した。

だが、それによって俺は守谷教授に狙われる身となった。

しかし、幾ら警察や犯罪者を裏から操っても、事象の先読みに関与した俺を捕まえる事も、殺すことも出来ず、守谷教授は直接俺を追うことになった。

そして、互いに互いの先を読む、先読みの応酬の末、今に至る事になる。

俺は教授により、滝が流れる崖へと追い詰められていた。

だが、それこそが俺の狙いだった。

自らがおとりになる事で、守谷教授をおびき寄せ、直接対決するのだ。

銃殺であろうが、刺殺であろうが、相手の手段はどうあれ、現行犯であれば警察でなくても逮捕する事が出来るからだ。

つまり、相手の攻撃を躲し、取り押さえる事が出来れば俺の勝ちだ。

例え一撃食らえば致命傷になるような武器だろうが、ノーモーションで攻撃するのは不可能だ。

むしろ、殺傷力の強い武器程動きは大きくなる傾向にあるので、相手の初動にさえ警戒していれば十分避けられる。

日本の古流柔術をベースにしたバリツと言う格闘技をマスターし、数々の修羅場を踏んできた俺にとってはイージーゲームだ。

さあ、来いと、俺が不敵な笑みを浮かべると同時に、守谷教授は踏み込んできた。

武器を取り出す様子は無い、一撃必殺を狙った技でもない、あれは、ジャブだ…！

まさか、そう来るとは！

一発一発の攻撃力は低くてもスピードが速く、次の攻撃へのモーションも少ないジャブの応酬は厄介である。

相手がボクシングで来るならば、こちらは足技だ。

守谷教授の初撃のジャブを顔面に食らうと同時に、俺はお留守となった彼の足へとローキックを叩き込むが、初動が遅かった為に十分な勢いを乗せる事が出来なかったので、ダメージは殆ど無いだろう。

一方で俺は鈍い痛みを顔面に感じていた。

体制は振り出しへと戻るが、痛み分けと言うには分が悪い。

「こう見えても私はボクシングの学生チャンピオンだったのだよ。君は自分をおとりにして、私をおびき寄せたつもりだろうが、追い詰めていたのは私の方だったようだな」

教授は再び踏み込み、俺に向かって素早いジャブを放つ。

顔面をガードすればボディに、ボディをガードすれば顔面に、打点を殺す為に接近すれば、レバーに攻撃を放って来る。

ボクサーではない俺には、その攻撃を捌き切れる程の動体視力、反射神経を持ち合わせては居ない。

ダメージが蓄積されて行くが、今は我慢だ。

俺のバリツは相手の攻撃を読み、その勢いを利用する技だ。とどめを刺そうとストレートやアッパー等の大技を仕掛けて来た時こそチャンスだ！

「私の隙を伺っているのだろうが、そうは行かないよ。何せ君を一撃で仕留める事が出来なくても、崖の淵へと追い詰め、滝つぼへと落下させる事が出来れば私の勝ちだからね」

俺はみるみる崖の淵へと追い詰められていく。

「さらばだ、無力な名探偵、穂村くん」

教授は俺を崖に突き落とそうとする。

だが、俺は教授の腕を掴み、共々滝つぼへと落下する。

叩きつけるような気がする衝撃の後、俺と教授の体は冷たい水によりもみくちゃにされながら沈んで行き、息の我慢も続かず水を飲み苦しみの中、意識が暗転していく。

こうして、俺の命は尽きたかのように思えた。

だが、気が付いたら俺は冷たい水の中で上半身を下にして泥に埋まっていた。まるで犬神家の一族である。

当然の事ながら、スケキヨ状態では息が出来ない。

せっかく助かっても、これでは死んでしまう、そう思った時だった。

誰かが俺の足を持って引き抜いた。

欧州系の若い女性のようにだった。白衣を着ている事から医療系の従事者だろう。

俺が英語でお礼を言うと笑われた。

「何、その言葉？」

どうやら、日本語が通じるようだ。それ所か英語が通じないとは、ナンセンスも良い所だ。

「君、泉に沈んでいたみたいだけど、体は大丈夫かな？」

泉？ 俺が沈んだのは滝壺のはずだが。体に怪我は無いようだが、なにやら様子がおかしい。

「怪我がないようで良かったわ。それで、ぼくは何処から来たのかな？」

中年に男性に対して、ぼくと言う呼称は不自然だと思ったが、そう呼ばれても仕方ないと言う事実気が付いた。

体が見事に縮んでいるのだ。

まだ、十代にも達していないだろう年齢の少年になっていたのだ。

その様子を見て女性が答える。

「君はひょっとすると、異世界転生者って心の病気なのかな？ たまにいるのよ。何かの要因で記憶が混乱し、自分が異世界から来たと思い込んでしまう人が」

病人扱いは不本意ではあるが、そのまさかだろう。

それが、どのようなメカニズムかは分からないが、俺は一度死んで違う世界へと生まれ変わった可能性がある。

だが、女性に生まれ変わらなくて良かった。

近年の何でもかんでも女性へと転生させてしまう、若者向けサブカルチャーには疑問を覚えていたからだ。

それに体は子供、頭脳は大人とは、如何にも名探偵らしくて、悪くは無いだろう。

「もし、君が行く当てが無いならば私と一緒に来ない？ 私は修行の旅を終えて、これから街へと帰る所なの」

ああ、是非とも、そうしたい所だ。

「私の名前はメアリーよ。君の名前は？」

俺は探偵と言う肩書を付けた上で名乗る。

「よろしくね。異世界転生者探偵の穂村くん」

探偵の出番だ

「ここがベイカーシティ、私の街よ」

メアリーに案内された所は、まんま十九世紀後半のロンドンと言った雰囲気、蒸気と霧に包まれた石造りの街だった。

現代と比べれば一世紀程、文明の程度に開きがあるものの、原始的な暮らしでは無いは助かる所だ。

「そして、ここがアビー屋、私の下宿先よ」

どうやら、一階部分がパブリックハウス、つまり居酒屋になっていて、二階が住居になっているようだ。

メアリーが二階に通じる玄関扉を開くと、傘立てや照明等のありとあらゆる調度品に札が貼られていた。

この世界の字が読めなくても解る。これは差し押さえの札だ。

「これはどうしたのかしら…？」

そのただ事ならぬ様子にメアリーは戸惑いを隠せない。

「メアリーちゃん…！」

階段から初老の御夫人が降りて来ると、彼女の姿を見るなり涙を流しながら抱き着いた。

「おばさん、一体どうしたの？」

俺とメアリーは彼女が借りていると言う221B号室で、その御夫人、家主であるハドスン夫人の説明を受ける事となった。

最近、この街ではクーデターが起き、新たに領主になった女帝と呼ばれる全身鎧の女によって統治される事になったと言う。

その女帝と呼ばれる女の作り出した法律は酷いものだった。

『正当な理由があれば、実力行使で生命、財産を奪うことを許可する。ただし、抵抗され実力が及ばぬ場合はその限りではない』

つまり、この街では殺人や略奪を正当化する事が出来ると言う事だ。

そして、当然の事ながら、それを盾に殺人や略奪が横行する事となり、このアビー屋も例外では無かった。

アビー屋の店主であったハドスン夫人の旦那は不正を理由に殺され、この店は明後日、競売に出される事となり、売り上げの一部が犯人の手に渡る事となる。

「旦那は決して不正なんてする人じゃなかったのに、何でこんな事に…」

ハドスン夫人はそう嘆く。

こんな時こそ、探偵たる俺の出番だ。俺は捜査を買って出る事にした。

捜査開始

とりあえず、その不正とやらの証拠品を見せてもらう事にした。

舞台となるアビー屋の店内は大小様々な備品に差し押さえの札が貼られているものの、色とりどりの酒瓶やグラスが綺麗に陳列している。

異世界の酒の味には興味を惹かれるので、この事件を解決した暁にはご馳走になりたい所だ。

「お酒なんて君にはまだ早いでしょ！」

そう言うとメアリーに突っ込まれてしまった。

体は子供、頭脳は大人を売りにしている割に、元々も高校生で結局は子供だと言う事に違いはない某探偵と違い、俺の前世はれっきとした大人なのだが。

まあ、今は子供である事は事実なので、甘んじて受け入れる事としよう。

ハドスン夫人に紹介された不正の証拠品はワインセラーに入れられた年代物のワインだった。

もちろん、差し押さえの札が貼られている。

「それは100年前の大戦時に作られた伝説とも呼べるビンテージワインで、この店の看板とも呼べる逸品だよ」

突然、後ろから声を掛けられて振り向くと、そこには身なりの良い紳士が立っていた。彼の名はアガサ。常連客だとハドスン夫人が紹介してくれた。

アガサ曰く、そのワインは封が切られていない為、決して客に振舞われる事は無いものの、是非一目見たい、買いたい、飲みたいと言う数々の好き者を引き寄せて来たらしい。

かく言うアガサもその一人で、何度も店主に売ってくれるように頼んだが、どれだけ金を積んでも断られ続けたそうだ。

「だが、まさか、それが偽物だったとは」

アガサは嘆きながらビンテージワインを眺めると退出して行った。

そして、問題となっているビンテージワインをよく見ると、封印されたコルクや瓶は明らかに古い感じであるが、そこに貼られているラベルは古めかしく加工されているものの、新しい様子だった。

次にハドスン夫人に犯人について聞く事に。

「旦那を殺したのはクリスと言う男だよ」

クリスは長年アビー屋のバーテンダーを務めていた男で、娘が病気になって大金が必要になり、店主の不正を理由に大金を要求したようだ。

だが、店主が金の用意が出来ないと断ると襲い掛かり、抵抗されるものの殺害してアビー屋の権利を強奪したと言う。

「クリスは元々孤児でね、荒れた生活を送っていた所を旦那が拾い、反発しあう事もあったものの真面目に働いてくれてね、子供の居ない私たち夫婦は実の息子のように思っていたのに…」

そう言うとハドスン夫人は涙する。

「これも旦那がクリスにプレゼントするつもりで用意していたものさ。でも、今となってはね…」

ハドスン夫人が見せたものは木箱に入れられた年代物のグラスだった。

曰く、問題の発端となったビンテージワインと同様に100年前に作られた価値のあるものだという。

次にハドスン夫人に第一発見者を呼んでもらい、殺人現場を見分する事にした。

第一発見者は酒の卸売業者のサムで、現場は店の倉庫で木箱に入れられたワインやグラスが綺麗に整頓されていた。

店主が殺されたのは店の閉店時間。夫人と共に昼食を取った12時から16時に商品を配達に来たサムに発見されるまでの4時間だった。

「何時もお店にいるはずの旦那さんが居ないので倉庫に行ってみたら、背中をアイスピックで刺されて床に倒れて居たっすよ」

そう当時の状況を説明するのはサムだ。

その時の倉庫内の様子を聞くと、何時もと変わらず綺麗に片付けられていたと言う。

それから、サムにクリスの印象を聞く。

クリスはサムの不良時代の兄貴分だったそうだ。

悪そうな奴は大体友達を豪語する不良の世界では名の知れた男だったが、バーテンダーになってからは不良仲間と手を切り、店主を父のように慕い真面目に働いていたと言う。

そして、バーテンダーと言う仕事に誇りを持ち、仕事道具を大切にしていたようだ。

その人柄は綺麗に整頓された店内からも伝わってくる。

だが、それ以上に家族を大切にしており、早くに奥さんを亡くしてからは、忘れ形見の娘さんを何よりも大切にしていたようだ。

「兄貴は大切な人の為ならば、自分の心を殺し鬼にもなれる人なので、溺愛する娘さんの為にと、父と慕う旦那さんを殺してしまうのも十分考えられるっすよ」

サムの証言は以上だ。

そして、いよいよ犯人であるクリスに会いに行くことに。

ハドスン夫人によると、クリスは毎日この時間、閉店時間中に娘のケプラに会いに病院に行っていると言う。

俺達はハドスン夫人に教わった病院に向かった。

「なんだか、入りにくいわ」

ケプラが居る病室の前でメアリーが戸惑っていた。

メアリーはクリスとその娘であるケプラとは顔見知りの為、どんな顔をすれば良いのか解らないようだ。

だがメアリーが躊躇していると病室の扉が開いて、出て来たクリスと、ベッドでバナナを食べていたケプラに顔を見られてしまった。

「あっ、メアリーお姉ちゃんだ！」

ケプラはメアリーを姉と慕っているようで、久々の再開に喜んでいる様子だ。

どんな顔をすれば良いのか解らなかったメアリーも、ケプラの天真爛漫さにすっかり毒気を抜かれてしまったようだ。

だが、ケプラは突然苦しそうに咳き込むと、クリスは心配そうにケプラの小さな背中を摩る。

「病状はどうなの？」

メアリーがケプラの病状を聴く。

「ああ、原因不明の咳が続き、昏倒する事も多く、とてもじゃないが退院する事は出来ない状態だ」

その言葉を聞いてクリスの気持ちを察し、言葉を詰まらせるメアリー。

メアリーの気持ちも解るが、そこで同情していたら真実に近づく事は出来ない。俺はあえて空気を読まず、それで、金が必要になったのかと単刀直入に聞く。

クリスは顔を強張らせる。

「実はそのことで来たの」

メアリーは悲しそうに言った。

クリスは表情を曇らせると意を決し、病室を離れると俺とメアリーに説明した。

ケプラの治療の為に金が必要となり、アビー屋の店主が不正をしたのを理由にお金を要求したが断られ、やむを得ず殺害してアビー屋の権利を奪ったと、凡そ聞いたままの内容 だった。

俺が時間はと聴くとクリスは迷いなく14時と答え、獲物は仕事道具かと聴くと渋い顔でアイスピックだと答え、激しく抵抗されたのかと聴くと、ああと短く答えた。

不正の証拠品であるビンテージワインには何時から気づいていたかと聴くと、初めからだと戸惑いながらも答えた。

それに対して、俺もそうかと短く答えた。

「他に方法は無かったの？」

そうメアリーがと聞くと、クリスは俯きながら沈黙した。

それを見て俺は静かに頷くと、そろそろケプラに挨拶してお暇するかと切り返す。

再び病室に入ると、もう帰っちゃうのとケプラが残念そうに言う。

「お見舞いに来てくれるのは、お父さんと、たまにバナナを持ってきてくれるアガサさんだけだから、メアリーお姉ちゃんが来てくれて嬉しかったよ」

俺はクリスが毎日絶対にこの時間に来てくれるのかとケプラに聞く。

「お昼からお仕事が始めるまでの時間、お父さんは絶対来てくれるの」

とケプラは自慢げに返した。

俺は良い父を持ったなと言いながら微笑むと、ケプラは満面の笑みを浮かべ、それを見ていたクリスは恥ずかしそうに笑った。

病院を離れると、メアリーが話しかける。

「やっぱり、私、クリスが旦那さんを殺害したとは思えない」

俺は何故そう思うと聞き返す。

「理由なんて無いけど、直感、いやそう思いたいだけ」

そう、メアリーが呟いくと、俺はその直感、悪くないなと呟いた。

それを聞いて嬉しそうなメアリーに俺は言う。

一見すると矛盾が無いように見えるクリスの供述だが、俺から言わせると矛盾だらけだ。

第一、クリスにはアリバイがある。

クリスは毎日欠かさず昼から夕方の閉店時間にケプラのお見舞いに行っていた。

子供、しかも身内の証言は証拠にはならないが、恐らく看護師や医者に話を聞いたら、ケプラの証言通りの答えが返ってくるだろう。

しかも、プロ意識が高いクリスが仕事道具であるアイスピックを殺人に使うとは思えない。

また、争った末に殺害したと言っている割にはボトルやグラス等デリケートな物の多い倉庫は荒れている様子は無かったし、傷口は不意を突いて背中から一刺ししたと物語っている。

つまり、真犯人がいる。

おそらく、クリスを犯人に仕立て上げる事で利益を得る人間が裏で手を回しているのだろう。

「それは誰なの？」

俺はそれには答えず、笑みを浮かべた。

それを確かめる為、ハドスン夫人から聞いた競売のディーラーに会いに行くことに。

競売のディーラーは見るからに裏社会の人間と言った胡散臭い紳士だった。

聞けばクリスの元不良仲間だそう。

今回の競売の利益を聞くと、最近流行りの強奪による競売は日く付きで決して高くは売れない為、ディーラーの利益率が高く設定され、売り主の取り分は少ないとか。

それでもアビー屋の立地条件や歴史的な価値を考えれば、娘の治療代金には困らないだろうとディーラーは言う。

「あいつも行きつく所に堕ちたな」

と嬉しそうに笑うディーラーを見て嫌悪感を露にするメアリーに対して、あくまでも俺はクールな表情を崩さない。

俺は最後に今回の競売の顧客リストを見せてくれと言う。

「それにはそれなりの代償が必要だ」

そう笑うディーラーを俺は一閃する。

子供の身体になってもバリツの技は健在だ。

仰向けに倒され何が起きたか解らず目を日開くディーラーに俺は言う。

ガキに倒されたなんて、言いふらされなくなかったら、大人しく顧客リストを見せる事だなと。

そして、顧客リストを見た俺は静かに笑い、クライマックスと洒落こもうじゃないかと呟いた。

俺は崖にハドスン夫人とクリス、そしてアガサを呼んだ。

「なぜ崖なの？」

そう聞くメアリーに俺が答える。

犯人の退路を断って追い詰めると言う理由があるが、それ以上にその方が探偵らしいと思っているからである。

だが、前世ではまさか自分が落下して死ぬ事となるとは思ってもよらなかったわけだが。

「一体何なんだ？」

いきなり崖に呼び出され、切れ気味のアガサに対して、何なんだはこっちよとメアリー捲し立てる。

この件さと、俺はハドスン夫人の持ったビンテージワインのボトルを指さす。

アガサは驚きながら冷や汗をかき、クリスは俯きながら暗い表情を落とした。

「アガサさん、貴方は以前からアビー屋の店主から、そのワインを売ってくれるように頼んで断られていたのよね？」

「ああ、だが、そのワインは結局偽物だったわけだが」

俺の推理を代弁したメアリーが詰め寄ると、アガサは予め決めていた答えを定型文のように言い放つ。

「それは本当なの？ おかしいと思わない？ クリスは初めからこのワインが偽物だと気づいていたと証言したけども、プロ意識が高い彼が不正をするような旦那さんをお父さんのように慕っていたなんて」

クリスは黙ったままだ。

「父のように慕っていたからこそ、不正をする旦那の事を許せなくなったのも殺した理由の一つ

だろう、違うか？」

とクリスが黙ったままなのを良いことに、勝手な代弁をするアガサ。

適当な事を言うアガサの様子にメアリーは怒り心頭だが、あくまで俺はクールに言う。

そもそも、アビー屋の店主は不正等してはいなかったと。

俺はボトルのラベルの表面を剥がすようにハドスン夫人に頼むと、真新しいラベルの裏から古びたラベルが出て来た。

これがその証拠だ。

それを見て、アガサは固まり、クリスはため息をついた。

真新しいラベルが貼られ、ねつ造されたビンテージワインだと言っているわりには、コルクは年代物で、しかも一度も開けた形跡が無かった。お粗末な仕事だったなと俺は嘲笑する。

「だが、それと私に何の関係があるんだ！」

アガサが怒鳴る。

もし、偽物だと思われた本物が競売で安く売られるとしたら、アガサならどうするだろうか？間違いなく買うだろう。今回の競売の顧客リストにアガサの名がそれを物語っている。

俺に顧客リストを突き付けられて黙るアガサ。

「でも、何故こんな事を…」

メアリーは信じられないと言った顔でアガサを見る。

彼はあくまでビンテージワインを買うと言う事に拘りたかったのだろう。

盗んだものではステータスにはならないからだ。

だから、アビー屋の店主を自分で殺害し、ビンテージワインを加工して偽った上で罪をクリスに着せた。

娘が病気で大金が必要なクリスはアガサからの提案を断る事が出来ないからな。

あとは、競売に出されたビンテージワインを買い、本物だったと公開するだけだ。

「でも、そんな事をすればクリスは…？」

と、俯くクリスを見るメアリー。

クリスはねつ造した証拠品を理由に店主を殺害し財産を強奪したとあっては信頼を失うどころか、この世界では、それを理由に殺されてしまう可能性もあるだろう。

「酷い…」

と短く呟くメアリー。

クリスはそれが解っていても、大切な娘の為、自分を殺して鬼になる事を選んだ。

本当に強い男だ。

そこに来て初めてクリスが口を開く。

「だが、真相は俺が親方を殺し、アビー屋の権利を強奪した。それが全てだ」

クリスはあくまでも推理を認めようとしなない。

「そうだ、クリスが自分で罪を認めている限り私は無実だ！」

とアガサは嬉々として言う。

それを見て俺は笑みを漏らした。

お金の事ならば心配しなくても良いと言うと、俺はハドスン夫人の名を呼ぶ。

彼女は木箱から繊細な細工がされたグラスを取り出した。

それはワインと同じく100年前に作られたビンテージもののグラス。

「それは旦那さんがクリスに贈るつもりだったものよ。

最高の酒には最高のグラスを、って考えた旦那さんはクリスの為に大切にしていたワインをお客さんに提供して、売り上げを娘の治療費に充てる為にそのグラスを用意したんじゃないかな？」

メアリーの話聞き、自分を思う店主の気持ちを知り、目頭を押さえるクリス。

「だが、もう遅い…」

そうクリスが呟くと、俺は珍しく強い口調で言う、遅いと言う事は無いと。

クリスが真相を明らかにし、再びやり直す意思があるならば、遅い事などあるものか。

それを聞いたクリスは意を決する。

「犯人はアガサだ！ あいつは親方を殺した上でワインをねつ造し、競売の利益金と引き換えに俺に罪を着せたんだ！！」

ついに真相が明らかになり、うめき声を上げながら崩れ落ちるアガサ。

「それとケプラちゃんの病気の件だけど、バナナを調べれば毒が出て来るんじゃないかな？」

メアリーの手を聞いて、怒りをあらわにするクリス。

そう、ケプラは初めから毒を盛られ、仕組まれていた可能性が高いだろう。

「さあ、観念しなさい！」

そう、メアリーが詰め寄ると、アガサは地に伏せたまま、不気味な笑い声を上げる。

「まったく、君の推理力は素晴らしいな。おかげで、あの方から授かった私の計画は脆くも崩れ去ってしまったよ。だが、だからどうしたと言うのだ？」

予想外の答えに俺は表情を崩す。

「出来ればビンテージワインを買って手に入れたかったが、今となっては仕方がない。

私はアビー屋店主に100年物のビンテージワインを売ってくれと頼んだが不当にも断られ、それを理由に店主を殺害した。

そういう事で良いかな？

故に私はビンテージワインを含むアビー屋の権利を奪う事が出来るのだ！ そう、そのワインは既に私のものなのだ！！」

俺は苦虫をすり潰したような表情を浮かべる。

「もちろん、君たちには抵抗する権利がある。それが出来ればの話だが！」

アガサが指を鳴らすと、稲光が俺を襲う。

足元に落雷した衝撃で俺は飛ばされ、瞬間的に高熱に晒され致命傷を負い倒れていた。

なんだそれは…？

俺は息も絶え絶えになりながら、不可解な現象に疑問符を投げかける。

「見れば解るだろう、雷魔法だよ。私はこう見えても雷魔法の使い手なのさ。しかも、私にはコレがある」

アガサが指を鳴らすと、崖の下から海を割り、巨大な鎧が出現し、幾つかのパーツに解れると彼の全身を覆っていく。

「これもあの方から授かった私の雷魔法を動力にして動く特別製の鎧だよ。これがある限り、私は無敵だ！」

そう言うと全身鎧に覆われたアガサは、稲光に包まれながら凄まじい力で繰り出された鉄の拳で大地を砕き、その衝撃波で瀕死の俺は無残にも転がる。

「あの方が作り出したこの世界と力の前では、お前の推理など無力だったな！」

そうか、俺は無力だったのか…。

俺は今まで感じた事の無い無力感の中、あの滝つぼで死を迎えた時と同様の暗い気配に飲まれて

いく。

そう、俺は二度目の死を迎えようとしていた。

「では死ね！！」

とアガサが拳を振り上げる。

だが、その拳は俺に届く事は無かった。

アガサの巨大な拳をメアリーの小さな手のひらが受け止めていたのだ。

「穂村くんは無力なんかじゃない！ 自分を犠牲にしようとしていたクリスの人生を救ったんだから！！」

メアリーはそのままアガサの拳をつかみ上げ投げ飛ばすと、言ったでしょう、修行したって、と言いながら俺に微笑みかける。

てっきり、医者修行だと思ったのだが、どうやら違うようだ。

「そう、医者修行よ。私、回復魔法を習得したの」

そう言いながらメアリーが俺に向かって手をかざすと、暖かい光に包まれながら、みるみる傷が癒えていくのを感じた。

「回復魔法は人体を操作して自己治癒能力を飛躍的に高める事が出来るの。それを自分に使えば自己治癒能力だけではなく、ありとあらゆる能力が思いのままよ！」

白い光を帯びたメアリーが倒れたアガサの鳩尾に強烈な飛び蹴りを叩き込む。

分厚い鉄の装甲が薄いアルミ缶のようにへこみ、アガサは気持ち悪さを感じて咳き込むが、それをチャンスと捉えて彼女の足首を掴もうとする。

だが、それを察したメアリーはアガサの胴体をより強く踏み、バク転をしながら距離を取る。

アガサは反撃に転じようとメアリーの細い首に向かい、巨体を生かしたリアアットを仕掛けるが、彼女は難なく避けてアガサの胴体に強烈なカウンターパンチを叩き込む。

メアリーの細腕がアガサの巨体に突き刺さる。

「何故だ、何故同じように魔法操作で能力強化しているのに、私の攻撃は当たらないのだ…！？」

「私が操っているのは産まれてから今まで生きてきた自分自身の身体。何処かの誰かから貰っただけの鎧を操る貴方とは熟練度が違うわ！」

彼女が勢いよく腕を抜くと、元々凹んでいた装甲には大きな穴が開き、そこから血ともオイルともつかぬ液体が噴き出した。

うめき声を上げながら、鳩尾を押さえて膝をつくアガサ。

「身体操作により貴方の肝臓機能を著しく低下させたわ。

貴方は今後、大好きなお酒を飲むことが出来ない、飲めばそれは貴方を蝕む毒になるでしょう。

自分の身勝手な欲望の為にケプラちゃんに毒を盛り、店主さんを殺し、その罪をクリスさんに擦り付けた貴方に相応しい罰じゃないかしら？

いえ、足りないぐらいだわ！」

「ちくしょう…！」

と小さく呟くとアガサは倒れ、こうして俺の異世界に転生して初めての事件は幕を下ろした。

この世界の理不尽さや暴力の前では、俺の推理は力及ばないものの、決して無力ではなかった。

人の心を救う事が出来る。

そして、俺の力が及ばないのであれば、仲間と力を合わせれば良いのだから。

その事件の後、俺はメアリーと共にアビー屋に下宿させてもらう事となった。

アビー屋の大家はハドスン夫人、しかし、酒屋の店主はクリスへと変わっていた。

病気の原因である毒がバナナから発見され、解毒剤が飲まれた事により、クリスの娘、ケプ
ラは見事に快方に向かい、体力が回復次第、退院出来る見通しだ。

クリスも今まで以上に仕事に精を出している。

俺はクリスと対面しながらバーカウンターに座り、アビー屋の雰囲気を楽しむが、この体では
酒が飲めないのが残念だ。

「それで、穂村くんはこれからどうするの？」

決まっているだろ？

殺人や略奪が許される、このおかしい決まり事を作った女帝と言うやつを倒して、この世界に
正義を取り戻す。

おそらく、今回のアガサに武器を与え、入れ知恵して裏で操っていたのは、この女帝と呼ばれ
る奴だろう。

そして、この回りくどいやり方。

一度、死ぬ前にも嫌という程見て来た、彼のやり方に酷似している。

そう、守谷教授だ。

俺が子供の身体に転生したように、守谷教授も女の身体に転生していてもおかしくはない。

あの時は痛み分け、いや俺の負けだった。

だから、今度こそは絶対に勝つ。

方法は見えている。

正当な理由があれば実力行使による殺人、略奪が許されるならば、守谷教授の不正の証拠を見つけ、支配者と言う立場を奪ってやるまでだ。

それには様々な事件を解決して、守谷教授に繋がる糸口を探し出すと共に、志を共にする仲間を集める事が必要だ。

俺達の戦いはこれからだ！

あとがき

何年振りかわからないくらい久々の小説で、しかも自身初となる推理ものです。

結婚して以来、目まぐるしく変化する日々に忙殺され、しばらく創作から遠ざかっていましたが、嫁さんの趣味に付き合っサスペンスを見る事が多くなっていたのですが、その影響か、ある日突然推理ものの夢を見て、それがあまりにも面白く感じたので、小説と言う形にする事にしました。

でも、ただ書くのではつまらないので、一人称なのに主人公に喋らせず、キャラクターのセリフを減らし、感情描写を無くして、アドベンチャーゲーム的な作風になるようにしました。

それでいて、構成は少年漫画の読み切りのようなスタンダードなものになっています。

異世界転生した名探偵は無力でしかない

<http://p.booklog.jp/book/125735>

著者：ゆうすけ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yusuke-e256/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/125735>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト